

北海道における刀子の形態的変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2950

「北海道における刀子の形態的変遷」

福田 智子

アイヌの民具にマキリと呼ばれる小刀がある。マキリは考古学や民俗学からの研究がなされており、考古学では刀子に分類される。

民俗学からはマキリ鞘の形態的变化が研究されている。戸部千春氏は、マキリ鞘に典型的な湾曲形状は、和人文化起源の「蝦夷好太刀造」形状を典型としたと推測している。一方、考古学では小野哲也氏によって、刀身部についての形態的変遷の研究がなされている。小野氏は刀子を 類～ 類に分類し、外反りをもつ 類に重点を置いた分析を行っている。そして、17～18 世紀を境に 類における形態の画一化が起こっているという指摘をしている。

そこで本稿では、 類にも画一化が起こっていないかを検討した。その結果、17～18 世紀を境に「 類においても形態の画一化がみられること」、「 類と 類の形態に類似がみられること」が判明した。この変化の要因は、17～18 世紀以後に刀子の生産を本州に依存しているという、生産地の違いを想定した。



ユカンボシ E7 遺跡出土 刀子